大和文華館の四季（その4）

大和文華館館長　石 澤 正 男

芙蓉

萩

せいだかあわだち草

今は芙蓉が花盛り、これからいよいよ萩の季節になるところです。文華館の松林には山萩が沢山自生していますが、数年前から人工の加った数種の萩も移植しました。それらが今では大きな株になって、門から玄関へ行く坂道の左右の斜面に生い茂り、小さな花をたっぷりつけた枝が、たわわにしだれ、風に揺らいでいるのは、秋ならではの風情といえましょう。萩に紅白の２種類があることはどなたもご存じでしょうが、よく見ると花の大小と色合、枝ぶりや葉にも少しずつ変化のあることに気がつかれると思います。文華館の萩だけでも５、６種類はあります。中で変っているのは一株の萩から紅白咲き分けの枝が出ているばかりでなく、一つの花に紅白の２色が入りまじっているのもあって、これなぞは珍らしい種類ではないかと思います。萩はもちろん秋の七草の一つですが、ここの松林一帯には桔梗、女郎花、撫子、薄、葛は自生していますが、もう一つの藤袴（ふじばかま）も多分生えているのでしょうが、まだ目につきません。七草が揃うことも楽しくはありますが、中には敬遠したいものもあります。それは薄と葛です。根笹に実がなって親笹が枯れ、それに代って薄が猛烈な勢で蔓延して悩の種となっていることは19号に書きました。幸い葛は探さねば判らぬ程度ですから問題になりませんが、このところせいだかあわだちそうという、進駐軍の忌わしい置土産の侵入に悩まされています。私自身いつでも見つけ次第抜いているのですが、この草は地下茎と種子とで繁殖するので、根絶するのは容易なことではありません。この雑草は九州から東へ向って凄い勢で東漸してきたらしく、今ではもう近畿一帯は完全に席巻され、新幹線から観察しますと、この頃は岐阜、愛知の２県を侵略しつつあります。この雑草は稲の穂が美しく色づく頃、その名のように２．３メートルにも延びた丈の高い幹の頂上に黄色い鮮かな花房を一斉につけるのですぐ目につきます。時々電車の中などで、その花束を大事そうに抱えている人を見かけますが、この植物は恐るべき悪ものなのです。この雑草とは反対に東部日本から西へ向って、これも凄い勢で侵略を続けているぶたくさ―これも前者と同様アメリカ原産で進駐軍の残した最悪の置土産の代表といってよい悪い植物で、両者ともアメリカの恐ろしい風土病といわれる枯草熱病(Hay fever)の病源としてアメリカでは悪名の知れわたっている雑草なのですが、どうして日本ではその根絶を計ろうとしないのでしょうか。不思議で仕方がありません。今では到るところの空地や川の堤防などはいうまでもなく、路傍から個人の庭先までどんどん入りこんでいます。早く悪草退治の国民運動が起こることを切望しています。せめて文華館の構内からはこの悪草の締出しを図ろうと数年来職員に協力してもらっていますが、風に乗って四方八方から種子が飛んでくるのは防ぎようがなく、悪戦苦闘を続けています。読者の皆様もそれぞれご自分の地域で悪草退治のキャンペインをしていただきたいものです。花の咲くこれからが絶好のチャンスです。

この「たより」がお手許に届く頃には、そろそろ木々の紅葉が始っていることでしょう。文華館の庭で紅葉する木といえば、ぬるで、やまはぜ、やまうるし、南京櫨（なんきんはぜ）なぞが目ぼしいところですが、一番目立つのは南京櫨といってよいでしょう。この木は奈良公園には随分早くから植えられ、秋の公園を美しく彩っていますが、文華館で植えたものも樹令10年とはとても思えぬほど立派に生長し、門の左右にある数本の南京櫨の紅葉は実に美事です。ぬるで、やまうるし、たらなぞは樹液にさわるとかぶれる人が多いので危険ですが、いずれも松林の中にあって一際紅葉が目立ちます。

私が東京から奈良へ移ってきて毎年味わっている大きな悦びは夏から秋にかけて鳴く虫の豊富なことです。ことにきりぎりすと松虫が沢山いるのは素晴らしいと思います。というのはきりぎりすも松虫も今では都会の中にある自然からは全く縁遠いものとなってしまったからです。きりぎりすは７月早々に鳴き始め９月一杯鳴き続けます。いかにも真昼の夏の暑さを満身で歌っているような感じの虫です。松虫は朝夕秋の気配を思わせ始める８月下旬から10月末まで鳴き、鈴虫やこおろぎ類と共に秋の夜の鳴く虫の代表といえます。松虫やこおろぎ類は、晩秋には昼も鳴くようになり、短い命の終りの近いのを思わせて一入哀れを感じさせます。その他にくさひばり、きんひばり、かねたたき、えんまこおろぎ等々沢山美しい音の虫がいます。くさひばり以下に挙げた虫は目につかない程小さな虫ですが、案外皆様の身近かに、しかも樹木のあるところならば都心でも充分鳴く音を楽しめるということを書き添えて、この項は終りとします。（９月２日誌）

季刊 美のたより No.22
昭和47年10月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.